



布施だより

《 始業式から 》

2学期始業式では3名の学年代表の皆さんから、2学期85日間への抱負が語られました。1年2組の樋本寧音さんは委員会活動と学習について伝えてくれました。「9月に銀河祭があります。私は実行委員なので、やることがいっぱいあると思います。初めてなので分からないこともあると思います。その時はそのままにしないで質問し、みんなが困ることのないようにし、当日は楽しい銀河祭にしたいと思います。期末テストを振り返ってみると、国語と英語で課題が見つかりました。国語は漢字と文章の読み取りをきちんとしたいと思います。英語は「書く」ことを大事にしながら、声にも出して発音よく会話できるようにしたいです。」次に2年1組の高野連君は新チームでのサッカー部々長の決意を語ってくれました。「この夏に、また大きな目標ができました。それは部活動です。3年生の先輩方と1年半一緒に活動をしてきて、試合終了の笛が鳴るまであきらめないことの大切さと部員をひとつにまとめて県大会へ進める強さを学びました。これからサッカー部々長として、1年生も含め部員全員をひとつにまとめ、最後まであきらめない強いサッカー部を創っていきたいです。」3年6組の北村英寿君はやはり、サッカー部の32年ぶりの県大会出場から学んだことを語ってくれました。「最後の最後まで選手もベンチもあきらめていなかったことと、ずっと大きな声で応援してくれた仲間や保護者の皆さんには感謝しています。県大会後の親睦会で部活動への感謝を伝えましたが、一番ビックリしたのは3年生だけでなく、2年生も泣きながらスピーチしてくれた姿を見たとき、西中サッカー部は全員が本気で上を目指していたことを改めて実感し、嬉しい気持ちになりました。ひとつの目標に対して、こんなに本気で一生懸命に取り組んだ仲間をずっと大切にしたいと感じました。」



学校長からは、夏休み中の部活動を始めとする生徒諸君の頑張りを讃え、2学期に向けて「粘り強さ」についてお話がありました。「この2学期は、登校日85日間の長い学期となります。季節も夏から秋、そして冬へと、3つの季節に渡る学期です。私は、常々、この2学期の過ごし方が、1年生にとっても、2年生にとっても、3年生にとっても、その後の中学校生活を大きく左右する大事な学期であると思っています。それだけに、この2学期は、どれだけ凡事を徹底した生活が送れたか、自分の目標に向かってどれだけ粘り強く取り組めたかが大切になります。」

3年生は、自分自身の進路選択がいよいよ現実になっています。そして、進路実現のために必死になっている頃です。また、銀河祭も終わり、生徒会の立合演説会も終わり、生徒会は2年生に引き継いでいる頃です。今の仲間と過ごす残りの日々のカウントダウンも始まっているかもしれません。2年生は、今の話のとおり、立合演説会を終え、2年生の中から新しい生徒会長や副会長、委員長や副委員長等の役員が決まり、いよいよ学校の中心となって生徒会活動を進め始めている頃です。部活動では、文化部の皆さんも、3年生から部活を引き継ぎ、2年生が中心になって活動をし

ています。1年生は、1年生としての生活も、3分の2を終え、新1年生をどう迎えるか、先輩となる心構えを始めている時期です。

2学期の85日間の道のりをどのように歩み、何を大切にし、何を身につけ、そのゴールでどんな自分になっていきたいか。そのことを、一人一人しっかりと考えてみてください。そして、2学期の終業式までに「自分がすべきことは何か?」「自分が頑張ることは何か?」具体的に考えてみてください。

私は、今まで、明日からやろうと決めて、できたことはほとんどありませんでした。「明日からやろうと思う自分」は、次の日になっても、やっぱり「明日からやろうと思う自分」のままでした。ですから「明日からやろうと思う自分」を変えない限り、いつまでたっても決してできません。「今日できないことは明日になってもできない。」これは私自身の経験から確信していることです。

「明日からやろうと思う自分」を変える。どう変えるか。それは「今からやる自分」です。「今からやる自分」に関わって、心に残る言葉に出会いました。それを最後に紹介します。

～ 今、この瞬間に行動するから、これから訪れる未来が変わるのだ。先の見えない未来を、少しでも確実なものにするために、今を頑張るのだ。時間は、過去、現在、未来と連続しているかのように流れている。現在の自分は、過去の自分の行動、言動の集大成なのだ。自分の過去が花開いたのが、今の自分だ。時間は、過去と現在はつながっているが、過去と未来は、現在で分断されている。つまり、現在をどう生きるかで、未来が変わるということだ。「君の未来は、今日作られる。」一番大事なものは、今だ。今、この瞬間をどう使うか、どう生きるかで、未来は変わる。 ～

85日間の成長と変化をみんなで実感していく2学期にしましょうね。

《 よろしくお願ひいたします 》

2学期から新しい先生2名が来られました。新規のALTとしてジェニー・フー先生が、庁務員として依田憲幸先生が着任されました。

これからも一緒によろしくお願ひいたします。



《 2学年「岩菅山登山」レポート 》

前号での1学年戸隠キャンプに続いて、2学年の登山を関川晃弘先生が伝えてくれます。

7月24日(木)、天候の心配はないと思っていましたが、バスの中では空を見上げながら志賀高原へ向かいました。東館ゴンドラリフト乗り場に到着。パラパラと小雨が降り出してはいましたが、東館山頂へ。小雨は止んでいましたが、少し肌寒い天候。ガスがかかり、眺望はよいとは言えませんが、日差しで暑くなることもなく登山には適した天候です。

クラスごと記念写真を撮る間、長めの休憩をとり、いよいよ登山です。ゆっくりと隊が動き出しました(…と言ってもいきなり下りからなのですが)。寺小山スキー場のグレンデ下までくると、ここから本当に登山となります。急ではありませんがずっと続く登りに、生徒の息が上がり始めてくるのを感じます。スキー場リフト降り場で休憩です。

ここから登山道、「ここから登山の始まりです」この言葉を何回使ったか分かりません。岩菅山登山は、まさにこの連続で、ゴール、そしてゴールまでの道のりが分からない…、精神的にとてもきついです。

登山道らしく、樹林帯をしばらく登ります。前日までの雨により足下はぬかるんでいるところ



が多く、最初は靴が汚れることを気にしていてもそのうち気にしていられなくなります。寺小山山頂までは登り、そこを過ぎると下りとなります。下りになると楽になると思いきや、滑りやすい山道を下るのは疲れます。

全職員が無線で生徒の様子を報告しながら登ります。このあたりから、クラスの隊から遅れだしている生徒の様子が伝達されはじめます。スピーカーは ON の状態。職員の周りの生徒にもその様子は伝わります。「〇〇ちゃん、がんばれ」と決して届く声ではありませんが励ましの声をかける生徒。周りの仲間を気に掛け、励ましの声を掛ける生徒。立ち止まって休憩している生徒を追い抜いていくときに「がんばれ」と一声かける生徒。こんな生徒のすてきな姿がたくさん見られます。そんな声がけに力をもらい、登頂目指して自分のペースで一步一步進むことができたのでは…と思います。

下りが終わると稜線に出ます。はるか前方に岩菅山…。「あれが山頂じゃない?」「いや、ちがうだろう」そんな声が出ます。実際はそうなのですが、目指す山頂がまだまだ先と気付かれなように、生徒の会話に答えません。このあたりからきつい登りが始まります。それでも休憩ポイントのノッキリに到着。場の登山道を上ることになります。体力的にも精神的にもきついなか、みんなで励まし合い山頂を目指します。そして山頂、眺めはガスのため、ほとんどありませんが、登頂までがとてもきつかった分、登頂の喜びはひとしおです。



そして下山です。ノッキリまでは登ってきた道を。ノッキリからは登りとは違う道を延々と下ります。この下りもゴールが見えないため、けっこうきついです。途中、小雨もありカッパの着用、よけい大変です。それでも、一步一步進めます。下りきり、バスが見えたときは、登頂の達成感とは違った安堵の喜びをたっぷり味わいます。大きなけが等もなく、全員がホテルに到着。本当によかったです。

人生は登山に例えられます。自然の厳しさ、偉大さには人間の力は及びません。地形に合わせて登山道は登ったり下ったり、決して真っ直ぐの一本道ではありません。ゴールかと思えばさらに先がある…。こんな登山を経験したみなさんは、間違いなく成長している、つらいことや困難なことから逃げずに立ち向かえる強さを得てくれたと思います。

また、登山はもちろんのこと、なんの目的もなく進むことは楽なようでいて楽ではないということがわかります。自分の目指すべきゴール、目的や目標がはっきりしているとがんばれるんだなと改めて感じました。この点でも登山の経験を、これからの学校生活にいかしてほしいと思います。

～ ～ ～ ～ ～

夏休みの終盤 18 日 (月)、10:30 頃、生徒会役員の男子 2 名が「人が倒れています。氷ください!」と息せき切って走ってきました。何名かの先生方で駆けつけると、中学校前の横断歩道先の道を右折した道路上にお年寄りの男性が横たわっていました。(自転車走行中に、熱中症が原因で倒れたのであらうと思われます。) 女子バスケット部 3 年生 4 名が発見してくれました。その方の周りでは 10 名程の 3 年生の生徒諸君が強い日差しからお年寄りの体を守ろうと自身の体で日陰を作ってくれたり、近所の方が持ってきてくださった濡れタオルを額に当てたり、脇の下に入れてくれたり、体が熱くならぬようアスファルト上に水をまいてくれたり、救急車が来るまでお年寄りに寄り添い、ずっと体を気遣ってくれていました。

救急車が到着し、警察署の方に事情を話し、篠ノ井病院へ搬送されるのを見届けると、生徒諸君はまたそれぞれの活動へ安心して戻って行きました。「人助け」を当たり前、そして協力してやり遂げる青年らしい表情でした。清々しく振る舞える青年に育とうとしてくれています。～夏休みの、温ったかくてしみじみとした収穫でした。

